

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊29年目 **Nr. 332**

2017年3月号



Jean-Honoré Fragonard Das Mädchen mit dem Murmeltier, 1780er Jahre Aquarell, Röteln, über schwarzer Kreidevorzeichnung © Albertina, Wien
アルベルティナー 『ブッサンからダヴィッドまで Poussin bis David フランスの素描』展 4月25日まで展示



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 65



やや旧聞に属するが、昨年の十一月七日(三〇日)にかけて、日韓の原子力学会熱流動部会の共催により、原子炉熱流動と安全に関する日韓シンポジウムがメルパルク京都で開催された。世界の原子力設計と建設を主導する日韓二国が安全を強化することにより原子力システムの性能向上に貢献することが目的である。一九九八年の韓国プサンでの第二回以来、福岡、キョンジュ、札幌、チェジュ、沖繩、キョンチョン、別府、プヨと二年毎に開催してきて今回が十回目になる。最新の技術的情報の交換とともに、技術的な質の高さと参加者数の両面で成功を収めてきた。会費には韓国から八〇名

我が国から一〇五名、計一八五名の参加があり、招待講演一件、基調講演四件、七セッションより構成された。地元京都からは功刀教授が実行委員長、齋藤教授が開催地委員長を務めたのを始め、京大、阪大、神戸大の関連教職員や学生達も総出で対応した。

今回初めて日韓の協力により、若手への技術継承のためのシビアクシデントに関する短期コースが会費初日の午後開催された。筆者は日韓各二名の講師の一人として、五十名の日韓学生・若手技術者に対してシビアクシデント現象論に関する講義を行った。関係者のご尽力により、全体に内容的に充実した会合となり、短期コース



を含めて成功裏に開催できたのは嬉しかった。基調講演では座長を務め、また、運営委員長として晩餐会で乾杯の音頭を取るなど暗れがましい場面もあったが、韓国で教授を務めるなどかつての原子力機構炉心損傷安全研究室の仲間達三死と再会できなことが個人的な特記事項である。東京から駆け付けて、紅葉が美しい京都の秋を会合の合間に少々楽しむことができたのも幸運だった。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の城について述べてみたい。ウィーンの城と言えは王宮を始め、シェーンブルンやベルヴェデーレなどハプスブルク家皇帝の居所や宮殿が有名であるが、今回は中世風のロマンチックな城を紹介したい。ウィーンから高速を北へ三〇分位走ると、右手の丘の上に立派な要塞が見える。これがトヨタ車のCMに使われたクロイツェンシュタイン城である。この城は百数十年前にある伯爵が中世の古城廃墟の上に建てたもので、労働者千人が二三年間働いて造られた。元々の城は三〇年間戦時にスウェーデンの軍隊に壊され、廃墟として二五〇年間放置されていた。中世からルネサンス時代の様々なオリジナル建造物をそのまま移してあり、台所や武器庫には、城主が欧州各地から集めた調度品などが整然と置かれている。

一方、京都の二条通堀川にある二条城は、徳川家康が上洛時の宿所として慶長八年(一六〇三



年)に造営された。二の丸の中心的建造物である二の丸御殿からは、小堀遠州の代表作である桃山様式の池泉回遊式庭園二の丸庭園が望める。池には最も大きい蓬萊島、その北に亀島、南に鶴島がある。本丸に建てられた天守は七五〇年の落雷で焼失し、それ以降再建はされず、現在は天守台のみが残されている。徳川家康の将軍宣下に伴う賀儀(一六〇三年)と徳川慶喜の大政奉還(一八六七年)が行われ、江戸幕府の始まりと終焉の地でもある。今年は大政奉還百五〇周年に当たり、京都市では幕末維新をテーマとして、記念シンポジウムの開催、京の冬の旅キャンペーン、プロジェクト参画都市との交流、連携など様々な記念事業が予定されている。

余談であるが、筆者がウィーン赴任直後の二〇〇四年五月にクロイツェンシュタイン城を訪問しガイドツアーに参加した。二条城は生半時代も最近も何度か訪れた。大政奉還が行われた大広間が印象的である。両市の城を紹介できた幸運に感謝しつつ、時間がなく五分位で描いたクロイツェンシュタイン城のスケッチを掲載させていただきます。

■杉本純 東工大特任教授 前京大教授 元原子力機構ウィーン事務所長 ■